

てゐない佛陀降誕直後、之に灌水してゐるものと見做される。斯の如きが、二龍象を現はして居る事と其様子とを説明する上に、少くとも許容の出来る仕方であり又文獻でも證しうる方法である。この龍象の語の二義に關して、言語上、傳説上、更には、考古學上必要なあらゆる立證は、近刊の拙著に讓るの他はない。こゝでは、象も、全く女身と同じく、その傳記的意義を明確にする爲に、主題に添へたものに過ぎない事をいつておくに止める。若し蓮が、最初から使へる所に充分用ひてなかつたとすれば、この脆い花を人間は愚か象の様な大獸の臺座にしようとは、何人も考へ及ばなかつたであらうといふのは明かである。

こゝに、之までの解釋を立派に證據立てるものがある。更に統計を藉りて見れば、サーンチーでは、此の題材が樹と輪と塔と共に主要なものになつてゐる唯一のものである事を認めるので、(甲、第四百七十四圖)之は、門の彫刻で十回を下る事なく、之だけでその何を現はすかゞ夙に知れる筈であると思ふ。それで、若し、カニングム Cunningham やフ、ガソンが始めに此の題材を、ラク